

Title	小林秀雄「戦争と平和」論
Author(s)	尾上, 新太郎
Citation	大阪外国語大学学報. 77 p.73-p.82
Issue Date	1989-03-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81222
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

小林秀雄「戦争と平和」論

尾 上 新太郎

An Essay on Hideo Kobayashi's 'War and Peace'

Shintaro OGAMI

On the 8th of December, 1941, Japanese air riders suddenly attacked Pearl Harbor.
The aerial photographs in a newspaper of a later day aroused a deep impression on
Hideo Kobayashi.

He saw in them that war and peace were one and same.

I am sure that this idea is based on Buddhism.

And besides, I am sure that Buddhism is very humanistic in the true sense of the
word.

I discussed about these matters.

昭和16年（1941年）12月8日——日本時間——，太平洋戦争が始まった。開戦劈頭日本海軍は、ハワイ・オアフ島真珠湾に停泊中のアメリカ太平洋艦隊に対する主として航空機による奇襲攻撃を敢行した。攻撃は成功、日本側に大勝利を齎した。世界戦史に名高い真珠湾攻撃である。

小林秀雄の評論「戦争と平和」¹⁾（『文学界』昭和17年3月）は、その時の航空写真をもとにしたもので、写真は翌昭和17年1月1日付の「朝日新聞（東京本社版、朝刊）」に掲載されたものである。小林は元旦の朝、鎌倉の海に見える自宅の縁側で新聞に見入っている。

「戦史に燦たり、米太平洋艦隊の撃滅」といふ大きな活字は、躍り上がるような姿で眼を射るのであるが、肝腎の写真の方は、冷然と静まり返ってゐるように見えた。模型軍艦の様なものが七艘、行儀よくならんで、チョッピリと白い煙の塊をあげたり、烏賊の墨のようなものを吹き出したりしてゐる。

同「朝日新聞」の第一面は、二葉の真珠湾攻撃航空写真で殆ど埋めつくされている。写真は海軍省提供のものだが他面にも及ぶ。昭和17年の元旦を期して、真珠湾攻撃の写真の特集が組まれたわけである（無論特集は朝日新聞に限らない）。小林が見入ったのは、第一面上段の写真で、アメリカ太平洋艦隊の断末魔の様子が真上から俯瞰されている。下段写真には、湾内フォード島の斜め上からの全景が写し出されている。飛行場他の軍事施設が見える。島周辺には多数の艦船が浮かび、主力艦群が攻撃に晒されている。（巨大な水柱、そして（我が方の）機影が見える）。因みに、紙面最下部に二葉の写真の解説文がある。又それぞれ「吾ガ必殺ノ猛襲下ニ惨澹タル敵主力艦群」「真珠軍港フォード島周辺ニ葬り去ラレントシツツアル敵艦船及施設」と銘打った写真の図解が付されている。小林が言う「烏賊の墨のようなもの」とは、流出した重油だが、海面をどす黒く染めているさまが見える（無論写真は白黒）。上段写真の図解を頼りに見てみると、白い雷跡が認められる。魚雷は命中である。こういう写真に小林は見入った。実に勇ましい攻撃のさまだ——と常識的に言えばなるだろう。血湧き肉踊る——これが普通の印象であったろう。日本兵が勇ましくなかったというのでは無論ない。彼等は正に勇士だ。では勇士の見たものは何であったか。これは血湧き肉踊る話とは限らない。小林の写真の印象は冷静なものだった。「写真を眺めた人達は、皆多かれ少なかれ僕と同じ様な感じを、驚くべき写真に、驚くべきものが少しもないといふ困惑に似た一種の心理を経験したはずだと思ふ」とも言う。小林は縁側の椅子に腰掛けている。ふと眼を海辺へ逸す、

空は美しく晴れ、眼の下には広々と海が輝やいてゐた。漁船が行く、藍色の海の面に白い水脈を曳いて。さうだ、漁船の代りに魚雷が走れば、あれは雷跡だ、といふ事になるのだ。海水は同じ様に運動し、同じ様に美しく見えるであらう。さういふふとした思ひ付きが、まるで藍色の僕の頭に真っ白な水脈を曳く様に鮮やかに浮んだ。真珠湾に輝やいてゐたのもあの同じ太陽なのだし、あの同じ冷い青い塩辛い水が、魚雷の命中により、嘗て物理学者が仔細に観察したそのまゝの波紋を作って拡ったのだ。そしてさういふ光景は、爆撃機上の勇士達の眼にも美しいと映らなかった筈はあるまい。いや、雑念邪念を拭き去った彼等の心には、あるが儘の光や海の姿は、沁み付く様に美しく映ったに相違ない。彼等は、恐らく生涯それを忘れることが出来まい。そんな風に想像することが、何故だか僕には楽しかった。太陽は輝き、海は青い、いつもさうだ、戦の時も平和の時も、さう念ずる様に思ひ、それが強く思索してゐる事の様に思はれた。

深い思索を湛えた美しい文章である。「雑念邪念を拭き去った彼等の心にはあるが儘の光や海の姿は、沁み付く様に美しく映ったに相違ない」とある。又「太陽は輝き、海は青い、いつもさうだ、戦の時も平和の時も」と言われているのは歴史の根底にある「自然」だ。それは救済の色を奏でる。そして救済は心を砕いてみて初めて具体化する。又そして、真に戦うもののみがそういう心をもちうる。ところで、昭和2年書かれた「遺書体の断片」（江藤淳『小林秀雄』、角川文庫、昭和44

年4月、72頁以下による）中片言でだがすでにこういう青空や紺碧の海水がふれられている。まず江藤の説くところを聞こう「文体は初夏の感触を喚起する。これはあるいは2年前の小笠原旅行の記憶をとどめているのかも知れないが、初夏に書かれたためと考えることも可能かも知れない。初夏のある日、小林は『不思議な象徴』のような船を彼の想像の海に浮かべて、記憶に刻印された南海へと出発した」。さて、「遺書体の断片」、

僕はあさって南崎の絶壁から海にとび込むことに決まってる。決まってるのだ。僕にはあさってまでの事件が一つ一つ明瞭に眼に浮かぶ。太平洋の紺碧の海水が脳髓に滲透していったら如何に気持ちがいいだろう。

僕はまだ死なないでゐる。何故かといふと死ぬと決った日には、曇ってゐたのだ。僕は晴れた美しい空を眼に浮かべてゐた。処が目をさますと曇ってゐたのだ。それで何もかもめっちゃめちゃになった。又僕はやり直す事にする。

江藤淳は以下のように言う、

小林秀雄における「青い空と海」は、あたかもマラルメにおける《azur》のように「死」を非現実を、あるいは絶対を示す象徴である。以後、ふたたび想念の世界に沈んで行くこの「青」の主調音は、この遺書体の断片においてはじめて獲得された。このことは、彼が「批評家」になったということのもうひとつのあらわれにはかならない。この主調音が、いかに以後の彼の作品に反復されて、時には微かに、時には朗々と奏されるか。

こう言って江藤は、「戦争と平和」に「遺書体の断片」に認められる事を指摘する。特に江藤の文言で問題にしたいのは、以下のくだりである、

もしヴィジョネールがロマンティックであるなら、彼の批評はロマンティックであろう。しかし、そこに自らの存在を賭したイメージのない一切の議論を空論というなら、彼の理論は恒にあまりに彼の血肉を感じさせるのである。

小林のイメージに賭ける思いを的確に批評したものである。「青」は、小林の全存在を支える。空が青かったら死ねた——そう小林は言っているのである。そこに救済としての「自然」の問題を読み取る事が出来る。「自然」は歴史の根底にある「自然」と言うべきものであり、換言すれば、仏教で言う「空」に通じるものである。「雑念邪念を拭ひ去った彼等の心には、あるが儘の光や海の姿は、沁み付く様に美しく映ったに相違ない」。無心に戦う兵士達であつたればこそ自然が「沁み付く様に美しく」見えたのである。又無心でなかったならば、爆弾を命中さすという戦闘の目的

を果たすことは出来なかったろう、「どうして爆弾が命中する筈があるものか」。で、小林、

僕は、法華経だったかにあった文句を思ひ出してゐた。正確には思ひ出さなかったが、それは、衆生の目に却火と映るところも、仏の目には楽土と映るといふ意味の言葉であった。あゝいふ言葉は恐らく比喻といふ様なものでは決してないのだらう。僕等の心が弱いので、比喻と受取ってゐるより仕方がない、さう考へる方が本当ではないのか。

ところで、この後「戦場にある人達が仏の目を得たと言ふのではないが、日常生活の先入観から全く脱した異常に清澄な目を得てゐるといふことも考へられやしないか」とあるが、この点初出では、「戦場は楽土である、兵士は仏である、何がパラドックスだらうか」²⁾とある。やはり戦場の兵士達が仏であるとか仏の眼を得たとか言うていの事を軽々しく言うべきでない。言うとするなら比喻としてである。確かに彼等が「日常生活の先入観から全く脱した異常に清澄な目を得てゐる」もの達とはされる。そしてそういう戦場で戦う兵士達の心情にある意味で喩えられる仏の眼の問題がある。真に問題にすべきはこの点である。「心ないカメラの眼が見たところは、生死を超えた人間達の見たとおと大變よく似てゐるのではあるまいか」、その通りであらう。はっきりしている事は、一種「心ないカメラの眼」を小林ももったという事である。もしそういう事でなかつたならば、又こういう莊嚴で美しい、そして静謐さを湛えた文章は出来上がらなかつたであらう。しかし生死を超えた眼という問題は深遠である。歴史問題の解決の真に正しい視点でそれはあるものである。小林の「衆生の眼に却火と映るところも、仏の眼には楽土と映る」といふ言葉の出典は、『法華経』「如来寿量品第16」³⁾中の有名な「自我偈」——又「久遠偈」とも——である。該当する下りを掲げると、

衆生見却尽 大火所焼時
我此土安穩 天人常充滿

直前、

於阿僧祇却 常在靈鷲山
及余諸住处

の文句が見える。直後には、

園林諸堂閣 種種宝莊嚴
宝樹多華菓 衆生所遊樂

と続く。「四却」中住却の時が尽き壊却の時が到来、世界壊滅の災害に遇っていると衆生が見る時も、仏の国土は安穩、天・人が充滿していると説くのである。「我」とは、仏としての釈迦の自称であり、「如是我成仏已来。甚大久遠。寿命無量。阿僧祇却。常住不滅」と道破する当体である。そういう仏の眼からすれば、壊却の時にあっても同じ世界が安穩とされると言うのである。これは又娑婆即寂光浄土の思想とされるものであるが、そう言ったら、「即」それ自身が正に問題となろう。即ち、直前の言葉は、我々の意識からすると矛盾として否定されるべきものである。日蓮『観心本尊抄』に「今本時の娑婆世界は三災を離れ四却を出でたる常住の浄土なり仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体なり此れ即ち己心の三千具足・三種の世間なり」⁴⁾と言う。「娑婆世界は三災を離れ四却を出でたる常住の浄土なり」と言いうる視点こそ我々には問題である。勿論それこそ仏の視点であり、生死を超えた境位を言う。形式論理的には、娑婆即寂光浄土の「即」は成立しえない。唯の矛盾である。視点の転換がいる。形式論理は、「我」の論理と考えられるが、そういう我の否定に成り立つ論理、即ち仏教的無我の論理でなければ、「即」の成立はかなえられない。換言すれば、仏教的「空」の立場で初めて事柄は意味を持つことになるものである。そして現実の我々にとって重要なことは、如何にしてそういう「空」の立場に立ちうるか、転換しうるかという事であって、もし我々の現実が必然的に我を立てる事となっているのなら、事柄は、所詮^{ポストラート}要請の問題に留まることとなろう。小林は、『法華経』の文句を引用した後こう言っている。「あゝいふ言葉は恐らく比喻といふ様なものでは決してないのだらう。僕等の心が弱いので、比喻と受取ってあるより仕方がない、さう考へる方が本当ではないのか」と。視点（立場）の転換は強靱な意志を伴って初めて可能である。小林がそう言っている時、実は一種転換した立場に彼は立脚していたのではなかったか。確かに小林の言うように仏説が本当である。だが、そうした際現実的に問題なのは、如何にしてそういう仏説を体得しうるかという点である。もし仮に、仏教的空の視点を全身賭けて内に抱きうるなら、地獄絵さながらの悲惨な現実も即刻、そのまま楽土のありさまとされよう。小林が仏の視点を全的に得たと断定したら言い過ぎだろうが、人間の生死に関する根底的立場を何等かの意味で我ものにしたとは言いうる。小林秀雄の「戦争と平和」は美しくそして深く静謐さを湛えた文章で書かれている。そういう文体をもって形成されている見事な評論作品である。深く思索的である事とそれらが渾然一体化している。実はこう言った事を明確に指摘したのは、かつての「敵国人」、E.G. サイデンステッカーである。彼は『戦争と平和』の背後には、確かに、なにかまことに驚くべきものが隠れている」と言い、「そのなにかとは、驚くべき知性でもあることは無論だけれども、単なる知性という以上に、もっと全一的な精神とでもいうべきもの」と言う。「全一的な精神」とある点に留意しよう。この文章は、小林の全人的な行為に関係している。文章の魅力の真髓は、深く勝義に論理的である点にある。「確かにあの短い文章には、戦後の騒々しい平和論ばかりではなく、戦争中の好戦的な言論の洪水ともまったく異質の、何か深い静けさがあった」、彼は戦争に順応して態度を変えすることもしなかったし、また戦後、ヒステリックである点で

は、聖戦論と大差ない平和論が澎湃として興った時にも、これに順応して態度を改めることはしなかった。この時期を通じて、彼がいささかも動じず一貫した態度を取りえたのは、かならずしも知性や論理の問題ではない。小林さんの知性を否定するつもりはないことは、今一度念を押しておきたいけれども、しかしやはりこれは知性というより、もっと情緒的な強さというか、知性よりもはるかに深い、全人的な信念の問題であったと思ふ。確かにそれは驚くべき精神だった。そしてこの精神が、あれほど繊細で精妙な表現力と結びついていたという点で、ほとんど比類を絶した存在だった。日本的なるもののもっともすぐれた具現であった」(サイデンステッカーの文言は全て「内なる日本の開示」による、同文章は、『新潮』臨時増刊、小林秀雄追悼記念号、昭和58年4月、に掲載されたもの、安西徹雄訳)。「情緒的な強さというか、知性よりもはるかに深い、全人的な信念の問題」と小林の言動の根底にあるものを説明しているが、今小林の「太陽は輝き、海は青い、いつもさうだ、戦の時も平和の時も、さう念ずるように思ひそれが強く思索してゐる事のように思はれた」という言葉を想起していい。「念ずる様に思ひ」とある点に留意しよう。単に思慮するだけでは何でもない、同時に強靱な信念・意志を持つことが必要である。強く思索するとはそういう事である。念じて動じぬ——この決意が肝要である。で、そこにおける決意は、実は人間の意識でははからいぬものである。決意は決断と言ひ変えてもいい。宗教的決断である。そしてそれは、言えば常識だが、意識的なはからいを越えている。換言すれば、宗教上の決意・決断は人間の意識にとって結果的事柄に属する。もとより問題は、時代によって個人によって事情を異にする。ヒューマンイズムの時代たる近代にあってはそれは一般的でない。何となれば、宗教的決断とは、人間の自己否定の契機を内に有するものだからである。しかし「戦争と平和」を書いた小林には自己否定の視点がある。強く意志的にある。その力は、正しく言えば、恩寵に属するものである。ある超越的な力に否定されて自己否定である。「戦争と平和」の文体は、その根底的否定の力を心情的にも読者に働かせるものと言える。そこにおける言葉の単なる意味が問題なのではない。単にそのみなら仏教的ドグマの範疇を出ない。直截に言えば、小林は、歴史の根底にある「自然」を内に見ている。その歴史の根底にある「自然」とは、つまるところ仏教的空としていいものである。その際それが救済の色を奏でるものである事を忘れてはならない。これは根底の救済の問題である。我々人間は単に作られたものである。そして、小林も言っているように、人生はもともと戦いである。「戦は好戦派といふ様な人間があるから起るのではない」のである。それなら、当然ヒューマンイズムの立場からは平和を導き出すことは出来ない。小林はかつて田辺元の「種の論理」的発想を呈していた。「戦争について」(『改造』昭和12年11月)がその端的な例証である。我々は国家を単位として暮らしている。国家がなくなれば、人類の理想実現もない。戦争とはそういう国家の存亡の問題である。なんとしても戦争は勝たねばならぬ。戦争という現実と直面しては、人類の観点も外さざるをえない。こういう「種の論理」的発想から小林は質的に隔たった地点に「戦争と平和」において立つに至っている。「トルストイが、『戦争と平和』を書いた時に彼の剛毅な心が洞察したぎりぎりのもの」として「戦争と平和とは同じものだ」という思想があったのではなかったかと小林はする。戦争と

平和とは無論普通の意味では同一でない。しかし小林流には一つである。これは、仏教的空の観点で初めて言う事である。そう言う際大事なのは、全身賭けて空観を实践する事である。で、実践は直接人間的主体性の立場からして可能であろうか。何にしろ、小林「戦争と平和」には、「種の論理」的思想の破砕がある。田辺流に言うなら、撃辞が媒介になって判断の主述が結びつく。⁵⁾ 両者を根底的に統一する「無」が具体化する。しかしそう見るべきではなかろう。主述の対立があることが元々統一である。根底的統一を前提にしないで、どうして対立の統一が客観的に果たされるか。又言えば、現実的に撃辞が働きうるという事が——換言して、判断が可能だという事がとしてもよい——要するに根底の統一に媒介されているという事なのである。現実的に言えばこの事は以下の事を意味する。この世には無数の対立矛盾、そして闘争が渦巻いている。我々人間は、その主体性においてそれらをいちいち解決して行く、解決して行かねばならない。しかし、もし、原理的根底的にすでに問題が解けているというのでなかったならば、我々は根本的に言ってその直面する問題を如何様にも解きえぬであろう。何となれば、人間は単に作られたものだから。そして人生はもともと戦いだからである。端的に言えば、小林は、「戦争と平和」において、歴史の根底にある救済を感得したのである。それが他ならぬ「太陽は輝き、海は青い、いつもさうだ、戦の時も平和の時も」の真義である。そしてそこには、全身を賭けた視点の転換の問題があるのであり、小林は僥倖の機会を得て何らかの意味でそういう転換を経験したのである。

ところで、小林は戦争と平和は同じものという思想を呈していたが、この言葉はヘラクレイトスの思想を想起さす。ヘラクレイトスは、「戦いは万物の父であり、万物の王である」⁶⁾と道破した。又「神は昼夜、冬夏、戦争平和、飽食飢餓である」と。彼は、矛盾し合うもの同士の緊張関係のうちに統一を見た。対立の根底に統一を見た。それが神である。換言すれば調和であり、平和である。戦後の事だが、小林は「私の人生観」中「私の勝手な想像」と断わった上でだが、「釈迦の空とは、ヘラクレイトスの火の如きものではなかったか」と言っている。万物流転のヘラクレイトスの思想は、そういう仏教の「空」に通じる「火」の観点で言って初めて正しく現実の理法足りうる。突き詰めて言えば、「戦いは万物の父」という時、仏教的空の観点が入っている。否観点を入れなければ勝義には意味をもちえない。そしてそういう時、そこに闘争が即刻和合という思想が出る事になるのである。この点西谷啓治の深い思索がある（『宗教とは何か宗教論集Ⅰ』、創文社、昭和36年2月、中「空と歴史」）。西谷は、真の自己中心性を仏教的空の立場とする。無我の立場である。徹底した自己否定を通す事で人間は絶対的自己中心性を獲得すると説く。この立場は、「各自がそれぞれに絶対的中心である」立場である。それなら、そこには、「あらゆる闘ひより以上の闘ひ」がある。ヘラクレイトス流の根源的な戦いがそこに見られると言う。あの「戦いは万物の父」と言う次元での戦いである。とは、西谷は、ヘラクレイトスの言葉の内に、仏教的な空の視点を根本的に認めていると言う事である。又言う、そういう絶対の戦いが「空と無我の場においてのみ成り立ち得る限り、その闘ひは直ちに絶対的な和合であり、根源的な平和である」と。「空の場においては、根源的な闘ひと根源的な和合とは本質的に一つである」。真の戦いにおいては闘争即和合である。

で、真の戦いは各自が「空と無我の場」に立ちえて初めて可能になるのであり、又その時同時に真の和合も成立する。「戦争と平和は同じものだ」と言う時、正しくは、右のような意味での闘争のそして和合の精神がいる。そういう精神の成立する基盤は仏教的空の境位である。トルストイはそういう仏教的空に通じる視点を果して全身賭けて『戦争と平和』を書いた時獲得したといえるかどうか——今は論じえない。唯「アンドレイ公爵」がいる。彼の経験した「アウステルリッツの大空」に仏教的涅槃の思想に通うものがあるとする周知の説がある。アンドレイは、アウステルリッツの戦い——1805年12月、戦史上三帝会戦と呼称されている——で瀕死の重症を負う。仰向けに倒れる、大空が見える。

彼の頭上には、空のほかは、——灰色の雲がゆるやかにわたっている、明るくはないが、やはり無限に深い、高い空のほかは、もう何も見えなかった。『なんというしずけさだろう、なんという平和だろう、なんという荘厳さだろう、おれが走っていたときとは、なんという相違だろう』とアンドレイ公爵は考えた。『おれたちが走ったり、叫んだり、戦ったりしていたときとは、なんという相違だろう。フランス兵とロシア砲兵が恐怖と憎悪に顔をゆがめて洗杆の奪い合いをしていたときとは、なんという相違だ、——あのときはこの無限に高い空をこんなふうに雲がわたってはいなかった。どうしておれはこれまでこの高い大空に気がつかなかったのか？ やっとこの大空に気がついて、おれはなんという幸福だろう。そうだ！ この無限の大空のほかは、すべてが空虚だ、すべてが欺瞞だ。この大空以外は、何もない、何ひとつ存在しないのだ。だが、それすらも存在しない、しずけさと平和以外は、何もない。⁷⁾

これはニヒルな思想である。瀕死の重傷を負って初めて見るに至った無限に深い高い大空。アンドレイはその大空に喩えられる絶対の「しずけさと平和」以外の一切が空虚で欺瞞だと思う。一切の存在がそこでは否定される。そこに涅槃的思想を見る立場もある（メレジコフスキ『トルストイとドストエフスキ宗教思想篇』、朱雀書林、昭和17年5月、香島次郎訳、が端的）。筋の上からすると、これだけでアンドレイの思想を全的におさええたとはとても出来ないが、こういうニヒルな思想をアウステルリッツの戦いで彼が抱くに至った事も確かである。思想は、7年後のボロジノの戦いで再度重傷を負い、為に死に至る際極限に達する。それは、冷たくニヒルな生存一切の否定の思想である。しかし、その思想を抱く当人に何か肯定しているものがあるのではないか。少なくとも、どういう観点でそういう虚無思想を振り回しているのか注意すべきである。アンドレイ公爵の枕元に二人の女性が付き添う。一人は恋人ナターシャ、他は妹マリヤ。アンドレイには、7歳になる一人息子がいる。母親は産褥期に死亡した。マリヤが言う「『ニコールシカにお会いになりたいわね？ あの子はいつもあなたのことを思ひ出していたわ』」。これに対するアンドレイの態度は冷やかなものだった。「アンドレイ公爵ははじめてそれとわからぬほどのかすかな微笑を見せた、しかし彼の顔を知りぬいている公爵令嬢マリヤは、それが喜びの微笑、息子に対するやさしい愛の

微笑ではなく、公爵令嬢マリヤが、自分なりの考えで、彼を人間の感情にひきもどす最後の方法を用いたことに対する、やさしいしずかな冷笑であることを見ぬいて、慄然とした」。そこには、何であれ人間の感情というものを肯定する思想に対する批判が見られる。

公爵令嬢マリヤが泣きだしたとき、妹はニコールシカが父のない子になることをあわれんで泣いているのだ、と彼はさとった。彼は力を振りしぼって生にもどろうと努力し、そして妹たちの考え方に移ってみた。

『さもあり、これは妹たちにはかわいそうなことに思われるにちがいない!』と彼は考えた。

『こんな簡単なことなのに!』

『空の鳥たちは蒔きも刈りもしないが、汝らの父はこれを育ててやるではないか』と彼は自分に言った、そして同じことを公爵令嬢に言おうと思った。『いや、言わぬほうがよい、妹たちは別なふうにそれをとろう。彼女らにはわかりっこないのだ!みんなが尊いものに思っているこれらのすべての感情、われわれにきわめて重要なものと思われているこれらすべての思想、そんなものは——不用なものなのだということが、彼女らには理解できないのだ。われわれはしょせん理解し合うことはできないのだ!そう思って、彼は沈黙に落ちた。

命というものは生かされてのものと言うが、正に然りである。死も亦人間的主体性において如何ともし難いものである。それなら、何を思い煩うのか。と言うか、人間の思惑で何をしようとするのか。

マリヤの感情は、人情としてはよく理解できると言えよう。所謂それは、「もののあわれ」の感情の問題とされるものである。「もののあわれ」の感情の宗教心的性格については、本居宣長——小林秀雄に詳しい（小林『本居宣長』参照）。又宗教家・金子大栄の同様の説もある（『歎異抄』、徳間書店、昭和48年5月、「9 二つの世界」参照）。さらに言えば、仏教に「常懷悲感。心遂醒悟」（『法華経』「如来寿量品第16」）の言葉がある。「もののあわれ」の感情は語源的にはともかく、実際的には、一種の悲哀の感情を言う。存在の悲哀である。詳しくは小林が論じているところだが、その悲哀の感情、悲しみの心は、ある自得、さらに言えば悟りの心に飛躍する要素をもつものである。とは言え、何と言っても、死を否定的立場で把握する観点を前提にしたものである以上、本質的に宗教論足りぬところが「もののあわれ」論にはある。つまり、死を悲しいものとする前提から出発する以上、真に死を理解することは出来ぬという事である。アンドレイの思想はそういう反省を促す（これらの考察においてメレジコフスキ前掲書を参考にした、特に「三章 トルストイの神」）。但し、アンドレイの思想が正しく仏教的かと言うとそうとは言えぬ。この点明確にしておきたい。彼は一切の存在・生存の否定者である。しかし、自己の価値観の否定はない。つまり否定それ自身の否定はないのである。否定ということに彼は最後迄こだわっている。決してその点では

ニヒルにならない。そこに我がある。仏教においては、否定は絶対的である。否定それ自身も亦否定される。そこに一切の肯定があるのでもある。仏教的なニヒリズムはそういう豊かさをもつ。仏教的無はクリエイティブである。アンドレイの頭ではその点は理解しえない。結局メレジコフスキの指摘（前掲書、三章）にあるように、一切の存在の否定を語っても動物的自愛の感情の払拭はそこに見られないのである。

しかしアンドレイの思想を直截にトルストイの思想とはしえぬだろう。ただ、又本当にトルストイは、戦争と平和を剛毅にも同じものと小林の言うように正しくしえていたのであろうか。もし小林のいうことが正しいなら、『戦争と平和』を書いた時トルストイは絶対的闘争即絶対的和合の境位にあった。こういう立場でないと、所謂平和の実現のための実践も根拠をもちえない。ヒューマンイズムの立場の根拠が出えないとしても同様である。

小林が戦争という現実に対して厳しい認識をもつに至ったのは、昭和12年7月の所謂日華事変勃発以降の事である。前掲「戦争について」が端的にその際の思想を伝える。彼はその後、個人と国家の問題、さらには個人と人類の問題を真摯に考えるに至った。そこにおける思想は、田辺元の「種の論理」に重なるものがある。両者の国家観には類似点がある。但し、「戦争と平和」を読むと、小林に思想上の一大転換があった事が知れる。そこでは、即自的に肯定される国家という発想は越えられている。総括的に言えば、人生の戦士としての小林——そういうイメージをそこに見る。その際人生はもともと戦いである事を忘れまい。戦いにおいて原理的な意味を持つものは何か。真の平和は奈辺に成立するか、再言の要はなかろう。

注

- 1) 引用、『新訂小林秀雄全集第7巻』（新潮社、昭和53年11月）による。小林秀雄の作品の引用は、特に断わらない限り、すべて同全集による。
- 2) 引用、当該雑誌による。
- 3) 『法華経』の引用、以下を含めて全て、坂本幸男・岩本裕訳註『法華経』（岩波文庫、昭和42年12月）による。
- 4) 引用、『日蓮大聖人御書全集』（堀日享編、創価学会、昭和27年4月）による。
- 5) この問題については、拙稿「小林秀雄と田辺元」（『叙説』第12号奈良女子大学国語国文学研究室、昭和61年3月）参照。
- 6) ヘラクレイトスの文言の引用は、全て山本光雄『初期ギリシャ哲学者断片集』（岩波書店、昭和33年5月）による。
- 7) 引用、新潮文庫本『戦争と平和』第4巻（工藤誠一郎訳、昭和47年2月）による、以下も同じ。

補注 引用にあたり、漢字の字体、促音表記他適宜改めた。